

01 INTRODUCTION

**災害時だって、
ちゃんと食べたい。

災害時の食で、
体と心を
満たせられるように。**

食は、生命の根源。

人は食べることで、生きることができる。

しかし、大きな災害が起きると、

いつものお店から食材は消え、

水道・電気・ガスが使えず調理することもままならない。

食はかろうじてカロリー補給ができる程度。

つまり、大規模な災害時には、

普段通りの食事ができないことは避けられない。

しかし、本当にいつもの食事を諦めなければならないのか？

食べることを諦めなければ、

ちょっとでも日常に近い食事できれば、

少しでも安心して、

復旧・復興に向けてのエネルギーを得ることができるのではないか？

これは、災害大国・日本で生きるわたしたちの未来を紡ぐため、

全国各地から、「防災」×「食の支援」のプロフェッショナルが集い、

「災害時の食」について、

本気で語り合い、考え、実行する取り組みである。

「災害時の食」について考える、 「防災」×「食の支援」のプロフェッショナル

わたしたち「災害時の食の支援ネットワーク」は、全国各地で防災・災害支援や食の支援を行う団体が集まって生まれたネットワークです。「災害時の食」をテーマに、今後も仲間を集めて、ネットワークを広げていきたいと考えています。

すべての人に食べ物を

特定非営利活動法人
セカンドハーベスト・ジャパン



2002年より活動を始めた日本初のフードバンクです。まだ十分に食べられるにも関わらずさまざまな理由で活用されない食品を受け取り、それらを必要とする方々へ提供する活動を行っています。



Second Harvest Japan

一人ひとりに里を

NPO法人逢桜の里（あいらのさと）



『認め合い、必要とされ、人がつながり、笑いあえる居場所「里」が一人ひとりにある』学校での食の防災出張授業、おすそわけ活動、COCO-DINING（九電フラットスクエアでの里づくり）などを行っています。



Aira no Sato

タイムライン防災の先駆者

NPO法人
環境防災総合政策研究機構（CeMI）



環境や防災に関する社会課題を掘り下げ、政策提言や地域防災の活動支援を行っています。2014年、我が国初のタイムライン防災を三重県紀宝町で策定・運用、以降、全国各地で展開し、普及に努めています。



Crisis & environment management policy Institute

熊本の災害ボランティア拠点

特定非営利活動法人くまもと災害ボランティア団体ネットワーク（KVOAD）



災害支援と復旧・復興に向けた産官学民の調整を担い、関係組織の連携強化と人材育成に取り組んでいます。災害時のニーズの把握や、支援活動の調整、復旧・復興に向けた支援策の提言などを行っています。



Kumamoto Voluntary Organizations Active in Disaster

笑顔をお届けのお手伝い

NPO法人
ひのくにスマイルプロジェクト



熊本県菊池市を拠点に、こども・地域食堂、フードバンク活動、子育て不登校相談援助支援活動を展開、こども食堂ネットワーク、災害救援活動など多角的に支援しながら、みなさんに笑顔をお届けしています！



Hinokuni Smile Project

被災地支援のプロフェッショナル 特定非営利活動法人災害支援団Gorilla



災害時は被災地支援、平常時は様々な防災活動や地域支援を行っています。2018年の西日本豪雨災害時から活動を開始、岡山県に本部を置き、全国の正規団体員やその友人など無償ボランティアで構成する団体です。



Gorilla

食に困らない社会を目指して 一般社団法人フードバンクママトコ



どんな境遇の子どもたちも食に困らない社会へ。「もったいない」をなくして共に支え合う社会を目指して活動しています。株式会社共同を母体とし、その物流と食事業のノウハウを活かして活動しています。



Foodbank Mamatoco

「計画的な食の支援」で被災者を救う 食の災害支援タイムラインの紹介



1. これまでの食の災害支援の取り組み

わたしたちは、災害時における食の支援活動として、これまで被災地での炊き出しや食品配布等を行ってきました。

東日本大震災では、延べ 170 便以上のトラック輸送により、被災地の避難所や児童養護施設、高齢者施設、ホテル、現地の NPO などへ食品を提供しました。

このような食の災害支援をいっそう広げるために、さらなる作業の効率化や、他団体との連携の拡大と強化が必要であると考えています。



炊き出し



食品等の配布



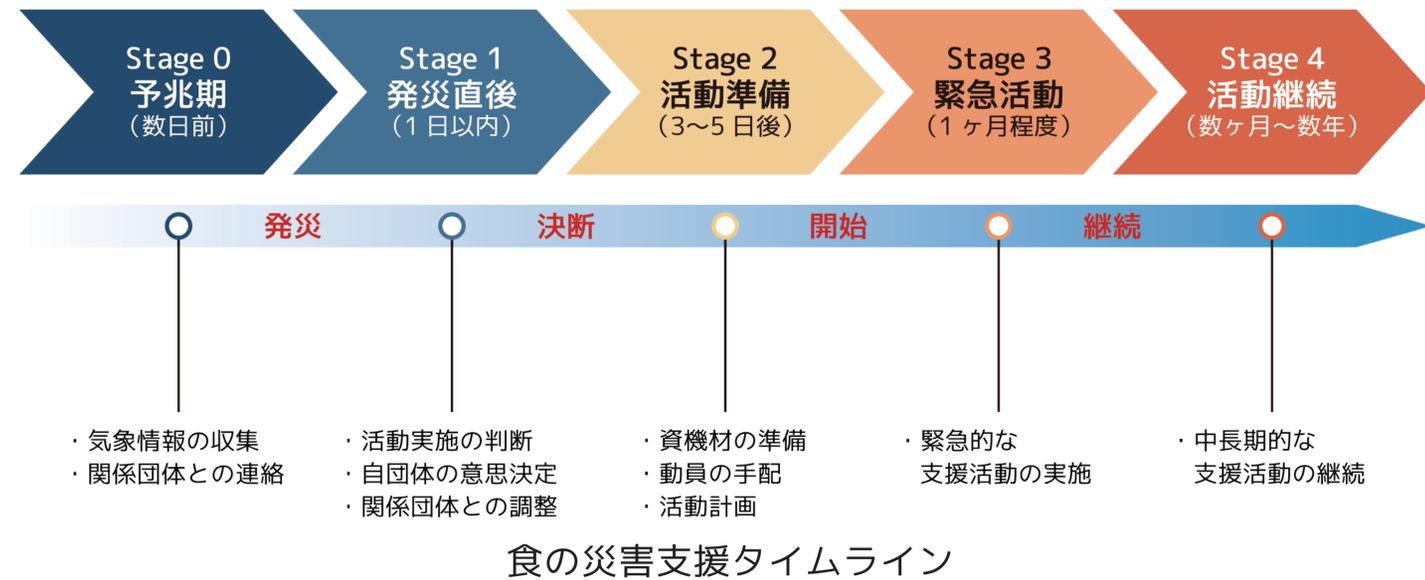
東日本大震災時の支援活動

2. 食の災害支援をより効率的で確実にするために

タイムラインとは、台風の接近時など災害の予兆段階の事前防災行動を決めて、関係者があらかじめ合意しておくものです。特に、「誰が」「いつ」「何を」するのかといった対応を明確にすることにより、避難や備えを効率的で確実にすることが期待できます。

わたしたちは、この手法を食の災害支援に応用し、「食の災害支援タイムライン」を作成することとしました。予兆期には災害に備えて関係団体が連絡を取り合うことや、災害発生直後から迅速に支援活動を開始することを目指します。さらに中長期にわたっての支援活動の継続に役立てることを想定しています。

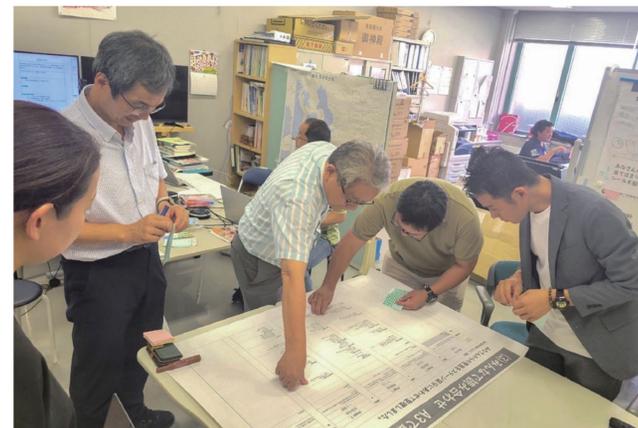
また、食の災害支援タイムラインは、ただ効率的な支援活動を支えるだけではありません。関係団体がタイムラインの作成プロセスで築き上げた連帯感と信頼関係は災害時の支援の現場で何よりも強い力となります。



3. 熊本の支援を形に

本年 4 月から、熊本県内の防災や食の支援のプロフェッショナルと協働して、食の災害支援タイムラインの作成に取り組んでいます。図に示したような災害のステージを設定して、それぞれの段階で誰がどのような行動を行うか意見を出し合い取りまとめました。

また、これまでに、同様の取り組みを九州地方・中国地方の 7 県で進めています。さらに、災害時の食の支援活動がより確かで強いものとなることを目指しています。熊本から、九州地方・中国地方へ、そして全国へと、このタイムラインを通して、食の災害支援の輪を広げようと考えています。



熊本での「食の災害支援タイムライン」ワークショップ

1. 連携プレーで、発災から4日後には食の災害支援活動を始動

2024年1月1日、石川県の能登地方を震源とした M7.6の地震が発生しました。わたしたちは、それから4日後には食の災害支援活動を始動しました。ここまで早期の段階で活動を始動できたのは、過去に行った岡山でのワークショップで生まれた他団体とのつながりが機能していたからです。ワークショップを行ってから、参加者同士でグループチャットを開設しており、ワークショップ後も日頃からコミュニケーションを取っていました。そして、1日に発災してからもグループチャットですぐにコミュニケーションを取り、発災から4日後には被災地で炊き出しを行うことができました。

能登半島地震発生からの支援活動

日付	事象・行動
1月1日 16:10	能登半島地震発生 (M7.6)
1月1日 16:12	グループチャットにて連携団体間で情報共有開始
1月5日~17日	七尾市田鶴浜コミュニティセンターにて炊き出し
2月5日~14日	七尾市中島健康福祉センター・すこやかで炊き出し
3月1日	中能登町に中継拠点倉庫を設置
3月15日~22日	七尾市和倉温泉にて炊き出し実施
3月17日	七尾市和倉温泉にてモバイルパントリー
4月22日	中能登中継拠点より団体に食品提供を開始
9月10日~21日	珠洲市飯田公民館にて炊き出し

炊き出し総提供者数：七尾市10,385人、珠洲市1,822人
炊き出しは、災害支援団Gorilla（岡山県）が実施、セカンドハーベスト・ジャパンが食材提供など後方支援のほか、フードバンクジャパン七尾、フードバンクとやまが現地での調整を行うなど、多様な団体の連携が奏功しました。

2. 被災地支援のハブとなる中能登拠点を開設

能登半島地震の被災地における長期的な支援を視野に、2024年3月、中能登町にセカンドハーベスト・ジャパン中能登拠点を開設しました。現在、3市3町の約20団体に食品を提供しています。

石川県 能登半島



セカンドハーベスト・ジャパン中能登拠点

3. 実際の活動の様子

炊き出しメニューは一汁三菜としました。栄養バランスの取れた食事が被災者の「心の復興」にもつながります。

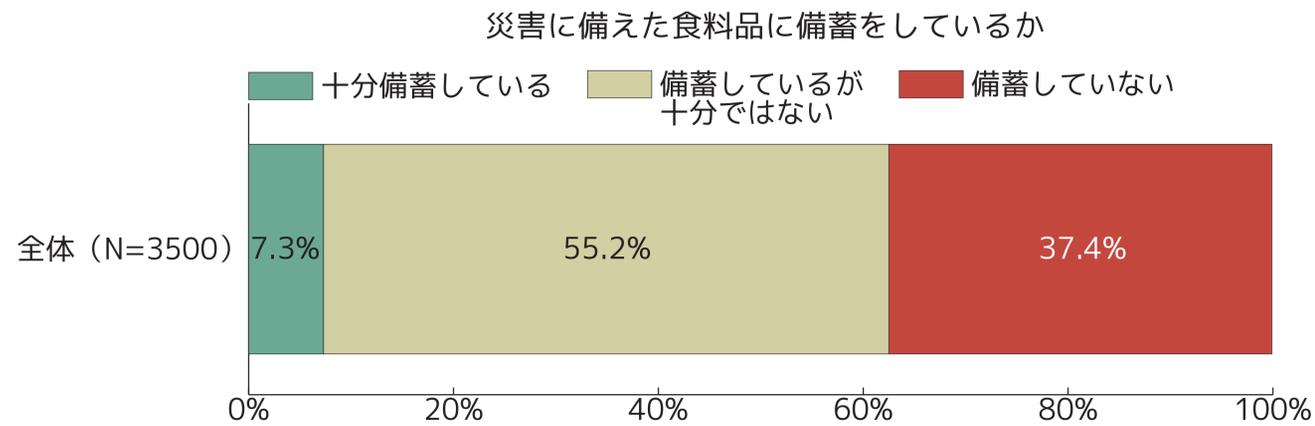


能登での災害支援活動の様子

1. 背景 今日の備蓄の現状

災害大国、日本。台風や大雨、地震など、様々な災害リスクのある中で私たちは暮らしています。そのような状況の中で、皆さんはもしもの時の食の備蓄を用意していますか？

2024年に農林中央金庫が行った「災害への備えと食に関する調査」によると、災害に備えた食料品を「備蓄しているが十分ではない」と回答したのは全体の55.2%、「備蓄していない」と回答したのは37.4%でした。逆に、「十分備蓄している」と回答したのは7.3%でした。つまり、きちんと備蓄している人は1割も満たず、備蓄していない人や十分に備蓄していない人が過半数以上を占めていることがわかっています。



出典：農林中央金庫，“災害への備えと食に関する調査”，2024年4月（参照：2024-10-01）

そして、指定避難所でもある熊本市立のすべての小・中学校は、災害時用の非常食や資機材等を収納している「分散備蓄倉庫」を設置しています。しかし、これは学校に避難してきた地域住民全員へ向けた備蓄であり、児童・生徒が一時的に学校で避難生活を行うための十分な量はありません。

もし、学校で子どもたちが暮らしている時間帯に災害が起き、学校で避難生活を送らなければならない状況になった場合、あなたの学校や地域は子どもたちの食を、安心を守れますか？自信持ってYESと言えるところはあまり無いかもしれません。

2. わたしたちの提案 学校に個人の食の備蓄を

わたしたちは、学校で暮らす子どもたちが、学校で一時的に避難生活を行うことになった際に、子どもたちが安心して避難生活が送れるよう、学校に個人の食の備蓄を行うための環境づくりを提案します。

3. 活動手法 学校と協力して備蓄BOXを設置

個人の食の備蓄は、図のようなBOXを個人ごとにつくり、学校の空き教室等に保管しておくようにします。

備蓄BOXは記名式で、個人のみが使えるものとしします。中身については、食品やペットボトルの水に加えて、トランプなどのゲーム、家族との写真、避難生活を頑張る自分へ向けての手紙など、避難生活時に自分が安心して過ごすためのものを入れて良いものとしします。



個人の食の備蓄 BOX のイメージ

4. 活動実績 七滝中央小学校での取り組み

プロジェクトを立ち上げ、今年の6月と9月の2回にわたり、実際に小学校で授業をさせていただけることになりました。

授業は、七滝中央小学校の4年生に向けて行い、防災に関する授業や、パッキングを行いました。そして、実際に備蓄BOXをつくってもらいました。また、備蓄BOXのパッケージ名を考えてもらい、「安心で笑顔あふれるパワフルボックス」と名付けてもらいました。

i) 防災に関する授業



ii) パッキング



iii) 備蓄BOXづくり



5. 共に活動を広げる仲間を募集します！

さて、ここまでパネルを読んでもくださった皆さんはどんなことを感じましたか？もしかすると、「一緒に何かやってみたい！」と思った方もいるのではないのでしょうか？

逢桜の里は、そんなあなたの協力を求めています！心が動いたあなたの力が必要です。わたしたちは今後、この活動を学校だけでなく、地域、そして全国に広めたいと考えています。ぜひ、興味のある方は、逢桜の里までご連絡ください！

逢桜の里
公式HP